

重点項目	学習活動	
重点課題	教科指導の充実と確かな学力の向上	
現 状	生徒の学習意欲や学習理解度に差が見受けられる。そのため、各教科において指導内容や指導方法の改善を図るとともに、生徒に意欲をもって授業に取り組ませ、確かな学力を身に付けさせることが必要である。	
達成目標	①指導力の向上を意識した授業改善 他の教員の授業を、各学期3回以上参観する。 生徒の学習に対する取り組み方や授業内容の理解度、満足度に関する状況調査をアンケート方式で行う。授業内容の理解度80%以上	②課題解決力を身に付けさせる 目標達成度評価表により、年3回以上評価基準に照らし合わせ自分を振り返る。 自己評価シートで項目ごとにチェック。課題解決力6項目で、S・A評価が全体の50%以上
方 策	- 各学期に互見授業週間（年3回）を定め、各週間に他の授業を各3回以上参観する。 - 参観者は、互見授業シートを記入し、授業者及び自らの授業改善に資する。 - 各科目学習アンケートを取り、生徒の授業への取り組み具合を確認する。	期末考査(年3回)後に、「課題解決力」6項目(コミュニケーション能力、自主性、協調性、粘り強く挑戦する心、創造性、確かな学力)について、現在のレベルをチェックし、評価の具体的根拠を記入し、提出。
達 成 度	互見授業評価シート回収率 1学期 96% 2学期 90% 教科別学習アンケート 1年生 各科目観点別評価3項目3段階で評価 2, 3年生 各科目課題解決力6項目5段階で評価 ・学期ごとのABCの変動等を教科の指導に役立てている。	富商ブランド自己評価シート課題解決力のS・A評価率 1学期 → 2学期 コミ能力 74% → 73% -1 自主性 72% → 69% -3 協調性 78% → 80% +2 挑戦心 67% → 69% +1 創造性 56% → 58% +2 確学力 49% → 52% +3
具体的な取組状況	- 互見授業では、I T Cを利用した授業への取り組みが多くみられ、新しい授業のスタイルへの探究心を図られている。3学期は2月10日まで行う - 学習アンケートは、2, 3年生はこれまでと同じ6項目5段階全教科で実施。 1年生は、新学習要領に基づき、観点別評価を自己評価の形で生徒にも教科ごと3段階で実施。 - 課題解決の自己評価については、1学期では「確かな学力」について、50%をきっていたが、2学期では「確かな学力」についても52%となり、学習への手ごたえを感じる生徒が増加している。3学期では、さらにポイント数が上昇することが期待される。	
評 価	B	1, 2学期の互見授業90%越え、学習アンケート全教科実施、自己評価は6項目中4項目で60%越えがみられた。
学校関係者の意見	- I C Tを活用する教員が増え、意欲的に互見授業を通して授業改善に努める姿勢が高まった。 - 学習意欲を維持するため、教員や生徒に対する学習アンケートや自己評価を今後も活用していきたい。	
次年度へ向けての課題	- 新年度からは2年生でも観点別評価に移行していくため、学習アンケート結果を分析し指導に生かす努力が必要となる。 - I C T利用の促進など授業改革が求められる。これまでの互見授業にさらにお互いを研鑽していくシステム作りが必要となる。 - 自己評価については、今後も継続していきたい。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった

重点項目	特別活動	
重点課題	部活動の活性化と競技力の向上	
現 状	・本校は運動部17、文化部11の計28部が設置されており、全員の部活動制である。 ・運動部・文化部ともに多くの部が、県大会優勝や全国大会入賞を目指して熱心に部活動に取り組んでいる。昨年度は北信越大会や全国大会がほぼ通常通り開催された中、全国大会出場者はのべ260名（32.8%）、北信越大会出場者がのべ370名（46.7%）で目標を達成できた。 ・部活動個人目標カードを用いて各個人の目標を立てさせた。「達成できた」「まあまあ達成できた」と答えた人は、69.9%と目標を達成した。	
達成目標	① 部活動の個人目標達成度 (個人目標達成者数÷全校生徒数×100)	②全国大会・北信越大会出場生徒の割合 (大会出場者の延べ人数÷全校生徒数×100)
	70%以上	全国25%以上 北信越40%以上
方 策	・3年間使用の部活動個人目標カードを作る。各年度で目標を立て、達成するための方策を考えさせ、結果目標が達成できたかどうかを振り返らせる。そして、次年度に向けて「心身の健康・人間関係能力・責任感・創造性・チャレンジ精神・リーダーシップ・フォロワーシップ」を意識させながら反省等を記入させ、生徒の部活動に取り組む意識を高める。 ・今年度入学生より、成績目標だけでなく生活態度の目標も立てさせ、それらが関連しあっていることを意識させ、達成のための方策を考えさせる。 ・各部活動を円滑に運営するために、適宜、部顧問会議やキャプテン会議を開き、諸問題について検討し、改善を図る。	
達 成 度	① 4月に立てた目標（競技成績、検定、人間性等）を達成できたかどうか、1月に調査した。その結果、「達成できた」「まあまあ達成できた」と答えた人の割合は、69.4%だった。昨年度とほぼ同じだったが、目標にはわずかに届かなかった。	② 全国大会出場者 186名（23.5%） 北信越大会出場者 412名（52.0%） ※のべ人数 全国大会は目標にわずかに届かなかったが、北信越大会は目標を大幅に超えることができた。
具体的な取組状況	① 部活動の個人目標達成度は、昨年度とほぼ同じだった。新型コロナウイルス感染症に留意しながらも、充実した活動ができたことが理由と考えられる。 ② 今年度は、28部中約半数の13部が全国大会出場を果たした。中でもワープロ部は全国大会3位、また弓道部に所属しながら国体馬術競技で8位入賞を果たした生徒もあり、全校生徒の励みになる活躍があった。	
評 価	B	① 部活動は、生徒が本校入学を決めた大きな理由である。その部活動の取り組みが満足に近いものであったことは喜ばしいことである。 ② まだまだコロナ禍ではあるが、それぞれが高い目標を掲げ、活動を工夫したことで、目標を達成できたと考えられる。
学校関係者の意見	・北信越大会の出場が生徒全体の46パーセントで、大幅に目標を超えることができた。 ・7割の生徒が個人目標を達成できたと回答し、今後は部活動の意義も考えることが重要である。	
次年度へ向けての課題	本校は全員の部活動制をとっているが、今後は中学校で地域移行を経験した生徒たちが入学してくる。部活動の教育的意義は言うまでもないが、今後多くの課題に向き合っていかなければならない。こうした過渡期に生徒、保護者、教員が十分にコミュニケーションをとりながら、課題の解決に向けて取り組んでいくことが大事。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった

重点項目	学校生活	
重点課題	・「SNS利用上の規範意識」の向上 ・交通事故の減少 ・風紀委員会の活性化	
現 状	・生徒は県内全域から通学し、他校に比べると広い地域からの生徒で構成されているため、入学当初、集団に溶け込めず、孤立しがちな生徒が見られる。 ・悪ふざけやちょつとした悪戯のつもりが人間関係を壊したり、人を傷つけたりすることに気付いていない、又は軽く考えている生徒がいる。 ・ほとんどの生徒が携帯電話、スマートフォンを所持していることから、SNSの不適切使用の恐れがある。 ・昨年度の交通事故が14件。自転車で通学している生徒が多く重大な事態に繋がる危険性を秘めている。また、自転車の乗車マナーについても地域からご指摘を受けている。 ・風紀委員の活動が少なく、学校生活の風紀を正すことに貢献できていない。	
達成目標	「SNS利用上の規範意識」の醸成（SNSの不適切使用によるトラブル発生件数 0件）	
	交通事故件数を極力減少させる	
	風紀委員会年5回以上実施し、風紀委員の自覚を高める	
方 策	・生徒に呼びかけ「携帯電話、スマートフォン利用マナー」のポスターを作成し、「SNSによるトラブル撲滅運動」を実施する。 ・5月のPTA総会や学年別懇談会を活用し、保護者に対し「SNSによるトラブル撲滅」への協力を養成する。 ・5月に交通安全指導講話を開催し、規範意識やマナーの向上を図る。 ・7月にスマホ安全教室を開催し、SNSの利用マナー向上に努める。 ・風紀委員会を年5回以上実施し、生活指導週間やさわやか運動へ参加し、規範意識やマナーアップ向上、自転車施錠等と呼び掛ける。	
達 成 度	・「SNS利用上の規範意識」向上のために、保護者への協力の呼びかけや、風紀委員による呼びかけを行い、7月にはスマホ・ケータイ安全教室を実施した。 ・自転車事故に関する注意喚起を掲示板で行い、自転車乗車ルールをクラスに配布した。5月には交通安全講話を実施し、6月には自転車係が自転車施錠呼びかけやステッカー確認でマナー向上を図ってきた。しかし、自転車事故は昨年に比べて増加した。 ・風紀委員会は全体会、係会議を含め年間5回以上実施し、規範意識の向上に努めた。	
具体的な取組状況	・本年度は風紀委員が、自転車係、ポスター係、掲示板係にわかれて活動した。生徒が考え活動することで、全校生徒の規範意識の向上をめざした。11月には風紀委員会がタブレット使用に関するルールを作成し、全校に周知した。 1 自転車係：自転車小屋での自転車施錠点検、ステッカー確認を実施した。また、西警察署との交差点指導等に参加した。 2 ポスター係：PCや手書きでポスターを作成し、廊下、階段、生徒玄関に掲示した。スマホ使用ルール順守の呼びかけ等のポスターを作成した。 3 掲示板係：風紀委員会からのお知らせを、クラスに掲示した。自転車事故があった場所の地図、自転車未施錠台数一覧、落とし物種類別件数、自転車マナー呼びかけ等の具体的な内容で規範意識の向上をめざした。 ・外部講師を招いて5月交通安全指導講話、7月スマホ・ケータイ安全教室などを実施しマナー向上をめざした。	
評 価	C	・風紀委員会の活動は活発に行うことができた。 ・自転車事故件数は増加した。 ・校内でのスマートフォン使用違反は多くあった。
学校関係者の意見	・生徒が自発的に活動し、SNSの規範意識を高められた。 ・継続して、交通安全やSNS利用の規範意識を指導し、生徒に自覚させることが重要である。	
次年度へ向けての課題	・生徒の規範意識全体をどのように向上させていくのが課題である。そのためにも今年度にはじめて風紀委員会活動を、継続発展させていくことが重要である。 ・スマートフォン等の適切な利用について、各教科やHR、学年集会、学校行事など、様々な機会をとらえて指導をする必要がある。 ・道路交通法の改正等もふまえて安全な登下校のための指導をすることで、加害者にも被害者にもならない取り組みが必要である。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった

重点項目	進路支援	
重点課題	・社会情勢や職業についての幅広い理解とともに職業観・勤労観を育み、一方で自己理解を深めさせ、生徒一人一人が能力や適性に合った進路選択ができるよう支援する。 ・自分の考えや思いを的確に表現できる文章記述力を系統立てて指導する。 ・個に応じた組織的・計画的な取り組みを通して、より効果的な進路支援を行う。	
現 状	・自己の進路目標において、職業観・勤労観の育みが遅い生徒は進路希望の確立が遅れがちである。 ・生徒自身の自己理解が不十分な生徒は、適性や能力に適合しない進路選択をする場合がある。 ・昨今、大学等の募集人員や受験倍率の変化、求人数が増加して就職希望先の選択の幅が広がっている一方で、生徒自身の自己理解が深まっていない場合に、安易な進路選択が中途退学や早期離職などにつながる可能性がある。	
達成目標	①小論文における読解力や記述力	②生徒の進路満足度（卒業時）
	小論文模試の評価向上	96%以上
方 策	・新聞記事の要約や自分の意見をノートにまとめ、物事を観察する力や分析する力を日頃から鍛えるとともに、思考を言葉にまとめて書き出す力を育成する。 ・国語科と協力して国語の授業を活用し、小論文記述力を学年進行で向上させる方策を実施する。 ・1、2年は年間3回、3年は年1回の小論文模試を実施。 ・外部講師によるガイダンスの実施により、幅広い知識や考え方を養う。 ・小論文模試では、「説得力」「構成力」等の評価の向上を目指す。	・進路ガイダンスや進路希望調査等を実施し、生徒が主体的に、より早い段階から具体的に進路を考えさせるように指導する。 ・進路適性検査等により、自己の能力・適性を考慮した適切な進路選択を行うよう指導する。 ・生徒の進路志望状況をできるだけ具体的に把握するとともに、家庭との連携を図るため、進路選択に必要な適切な情報を提供できるよう資料の充実を図る。 ・進路実現を目指す生徒に対して、全教員による面接指導や個別学力補充の場を提供する。 ・3年時に進路希望について大きな変更がある生徒については、十分な話し合いをするとともに、保護者との連絡を緊密に行い後悔のない進路選択を行わせる。
達 成 度	各進路に応じた志望理由を完成させることで、自己理解や進路意識向上にもつながった。	97.2%
具体的な取組状況	・小論文指導を通して生徒に自己の在り方生き方を見つめさせ、自己理解を深めながら、将来への具体的な展望を持たせた。 ・学期毎に小論文模試を設定。事前学習により生徒全員が小論文の書き方を学習し、事後学習で記述方法の確立を目指した。 ・論理的思考力を身に付けさせ、社会問題へのアプローチや意識づけを図るため、新聞記事を使ったワークシート教材を活用した。時事問題への関心や分析力を高め、自己の意見の明確化を図った。	・進路ガイダンス内容見直しや生徒保護者への資料提供、就職応募前見学増加など様々な面で改善を行い、特にミスマッチを防ぐことに力を注いだ。 ・状況に応じて、応募前見学の機会を5社提供するなど、一人ひとりの生徒に対して最後まできめ細やかな進路指導を実施した。 ・新基準を設け、一部の進学者に大学入学共通テストの受験に取り組みさせた。受験後の生徒アンケートでは、進学後を見据えた学力や特に学習への意識・意欲の向上に大いに意義があったとする多くの回答を得た。
評 価	A	本年度は進路指導における様々な場面での改善に取り組んだ。1・2学年に対する早期における進路の知識や意識の向上に努めており、次年度につながると考える。
学校関係者の意見	・生徒の職業観や勤労観を深めたことで進路実現に対する意識が明確となり、卒業時の満足度が高くなった。 ・毎年、進路ガイダンスの内容を学年スタッフとともに見直していくことが重要である。	
次年度へ向けての課題	・適切な進路指導による生徒のより良い進路実現と、新しい進路先での適応、更なる自己実現の両方を意識した学校全体による指導体制の構築を目指す。 ・生徒進路意識の早期確立と、より効果的な進路指導の充実を目指し、他の分掌や教科の先生方との更なる連携を深め。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった

重点項目	学習活動	
重点課題	1 授業の充実 2 検定・資格取得の向上	
現 状	全商検定 1級3種目以上合格者 令和元年度 56名(約20%)、令和2年度 59名(約21%) 全商検定 簿記2級合格者 令和2年度 126名(約45%)、令和3年度 90名(約38%)	
達成目標	1 授業の充実	2 検定・資格取得の向上<令和4年度1・2学年は、1学級減により6クラスにて計算>
	生徒の授業満足度 80%以上	全商検定1級3種目以上合格100名以上(約36%) 全商簿記2級合格 192名以上(約80%)
方 策	・授業担当者や学年と連携を密にとり、商業科全体で学習進度の統一や指導に向け連携を図る。 ・定期的に確認テストを行い、生徒の学習における未理解箇所を早期に発見し対応を行う。 ・授業を充実させることにより、生徒の学習意欲を喚起する。 ・基礎・基本の着実な定着を図るとともに、生徒の能力を最大限に伸ばすための学習指導体制を充実する。 ・生徒が苦手とする箇所を重点的に解説する。 ・教員間による授業の指導及び研究を行い、教員の指導力向上を図る。 ・1月に行われる検定については、補習授業を行い、学力の向上を目指す。	
達 成 度	1 授業の充実	2 検定・資格取得の向上
	○令和3年度 92.0% 1学年: 89.7% 2学年: 88.6% 3学年: 96.3% ○令和4年度 92.6% 1学年: 87.5% 2学年: 92.4% 3学年: 97.0%	1 全商検定1級3種目以上合格(第三学年) ○令和3年度 133名 3種目(83名)・4種目(23名)・5種目(16名)・6種目(8名) ・7種目(2名)・8種目(1名) ○令和4年度 80名 3種目(39名)・4種目(16名)・5種目(20名)・6種目(1名) ・7種目(4名) 2 全商簿記2級合格 令和4年度 146名(約60%)
具体的な 取組状況	・学年統一実施の課題テストによる、生徒の学習進捗状況の確認と指導。 ・2学期末考査後に検定対策の授業を毎日1時間設け、約2週間継続して実施。 ・検定試験直前期に7限目を設け、約3週間検定合格に向けた指導を実施。 ・検定試験直前期の放課後、希望者へ特別補習を実施。 ・積極的な公開授業による、教員の指導力向上。 ・生徒の記憶定着システム(モノグサ)を試行し、検定学習に向けた隙間時間の活用や自宅学習を促進 ・地域や企業、教育機関等、外部と連携した授業の拡大と充実。	
評 価	B	生徒授業満足度は目標を達成し、さらに昨年度を上回ることができた。全商検定1級3種目以上合格についても高い目標を大幅に上回り、昨年の合格率より約2.3倍増加させた。しかし、全商簿記2級については、達成目標である80%には到達できなかったが、60%まで上げることができた。さらなる工夫や改善に取り組む考えである。
学校関係 者の意見	・タブレットで隙間時間を有効に学習する環境を整え、各種検定試験に取り組めた。 ・次年度以降も、タブレットの有効活用を指導したい。	
次年度へ 向けての 課 題	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ・「創造力を引き出す」デザイン思考を活用した探究的な学びの授業研究。 ・1学年ビジネス基礎・2学年マーケティング、3学年総合実践での3年間を通して探究学習に具体的に取り組み、主体的に考え、学ぼうとする意欲を身に付けさせる取り組み。 ・課題研究の内容とシステムの再構築ならびにTOMI SHOPとの関連性の整理。 ・地域や企業、教育機関等、外部と連携した授業の拡大、充実の促進。 ・商業の科目を知識として学習するだけではなく、社会の中でどのように活かされているのかを意識させることで、キャリア教育、探究学習につなげる取り組み。 ・生徒が商業の可能性や面白みを理解し、商業を学ぶことの楽しさを知るための取り組み。 ・授業や自宅学習における、生徒一人に一台貸与されているタブレットの活用。 ・商業を学び活かしていくための基盤である生徒の基礎的学力向上。	

<評価基準> A:達成した B:ほぼ達成した C:やや不十分だった D:不十分だった

令和4年度 富山商業高等学校アクションプラン ―6―		
重点項目	学習活動	
重点課題	生徒販売実習「模擬株式会社 TOMI SHOP」を通して社会人基礎力を育成する	
現 状	社会人基礎力の中でも「考え抜く力」の評価が低く、他の力より伸び幅も狭い。 令和3年度は、最終自己評価でレベル3（通常の状況で効果的に発揮できた）の生徒が、 ○課題発見力 32.6% ○計画力 27.1% ○創造力 27.7%	
達成目標	「考え抜く力」の能力要素の最終自己評価のレベル3の割合 A 50%以上 B 40%以上	
方 策	①どのような店舗にしたいか目標を定め、共有する。 目標を定めておくことで、現実との差を感じ、その差を課題と認識することができる。 ②各営業日の閉店後に、ミーティングを設定する。 活動を振り返ることで課題が見える。また、解決策を考え実行する経験を積むことができる。 ③事後のTSHRで自分自身と他者を認めるワークを行う。 「TOMI SHOP」の準備や運営で、頑張っていた他者や自分自身を認めることにより、自己評価を高めることができる。 ④各能力要素の具体的事例を示す。 生徒はこれらの能力について、「TOMI SHOP」以外の場面でも実際は発揮していると考えられるが、自己評価が低い。ため。 ⑤「考え抜く力」の活用例を掲示する。 自然と「考え抜く」ことができるようになるには、日頃の生活や活動の中での意識付けが必要である。 「考え抜く力」について気付きの機会を増やすことで、「考え抜く」きっかけとする。	
達 成 度	<「考え抜く力」の最終自己評価> ・レベル3の割合（ ）内は事前評価 ○課題発見力 26.5%(18.6%) ○計画力 21.3%(12.4%) ○創造力 21.0%(15.5%) 参考・レベル2以上の割合 ○課題発見力 94.1% ○計画力 89.8% ○創造力 87.6%	
具体的な 取組状況	<方策について> ①TSHRにおいて、企業理念の学習の後、クラスごとに目標を立てた。 ②各営業日の閉店後に、店舗ごとのミーティングを行い、課題を明らかにし改善策を練った。 ③事後のTSHRにおいて、社会人基礎力の他者評価を行った。頑張っていたところを評価させるようにした。 ④具体的には実施できず。 ⑤「考え抜く力」の3つの能力要素について、短文（キーワード）を各階に掲示。生徒の目に触れるようにした。 <自己評価について> 事前評価（9月）、事後評価（11月）、最終評価（12月）の3回、Googleformsで行った。また、3回の評価のあとTSHRで振り返りを行った。 ※昨年度は自己評価を2回実施しており、昨年度の最終評価は、今年度の事後評価にあたる。 自己評価の基準(各能力要素に対して) レベル1:発揮できていない(どうしてもできない) レベル2:通常の状況では発揮できている(何とかできている) レベル3:通常の状況で効果的に発揮できている(見事にできている)	
評 価	C	3つの能力要素とも目標を下回った。しかし、事前評価と比較すると高くなっており、一定の効果はあったと考えられる。
学校関係者の意見	・TOMI SHOPを通して社会人基礎力の育成を図り、レベル3の割合が事後評価より最終評価で、すべての能力要素で高く、一定の効果があることを実証できた。	
次年度へ向 けての課 題	・自己評価が高いということは、生徒がそれらの能力を発揮できていると実感することに他ならない。そのためには「TOMI SHOP」の前後だけでなく、年間を通しての社会人基礎力への意識付けが必要である。 ・2年間Googleformsで自己評価を行ったが、評価の記録が目に見えないため、この方法が適切かどうか検討の余地がある。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった

重点項目	特別活動	
重点課題	読書の楽しさに出会い、本や雑誌を活用して探究する姿勢を学ぶ	
現 状	・活字離れが著しい生徒に対して、本を手にとったり、図書館を知ってもらったりする契機として、教科と連携して、授業の中で貸し出しを行っている。読書へのきっかけ作りにはなるが、生徒自身が本を主体的に読む工夫や蔵書の充実が必要である。 ・タブレットを活用した授業へのシフトにより、図書館利用が減少している。資料センターとして、授業その他で活用しやすい図書館を目指していきたい。	
達成目標	① 生徒の読書への興味を喚起する企画の工夫	② 授業で活用しやすい図書館の環境整備
	各学期3回	通年
方 策	・1学年での図書館利用指導を充実させる。 ・「新刊図書案内」（図書部発行）や「図書館便り」（生徒図書委員発行）内容を工夫し、生徒の図書館へ興味関心を含め、生徒の読書に対する意欲を喚起する。 ・領域やテーマを決めて関連図書を展示したり、話題の図書を随時紹介したりして、生徒に図書館利用を促すような企画展示を積極的に行う。 ・図書や雑誌の購入にあたり、生徒や教員の希望を多く取り入れ、利用を促進する。 ・国語科、地歴公民科をはじめ各教科と連携して、読書感想文や小論文、レポート作成の際の図書館の活用方法や新聞の活用の仕方について理解を促し、図書館の日常的な利用を図る。 ・ICT教育に対応した図書館の役割を探り、授業で活用してもらいやすい環境整備に努める。	
達 成 度	年間14回の企画展示を行った	Wi-Fi環境、視聴覚機器の整備 探究学習や課題研究で使い易いような書籍を選定し、配置を工夫した。
具体的な 取組状況	・1年生に対して、オリエンテーション期間中に図書の貸し出し、返却の仕方を体験させた。また、読書感想文の書き方指導に合わせ、夏休みの読書本のリストを作成してHPに載せ、長期休業中も読書に向かいやすい環境を整えた。 ・生徒の学校生活の進行や、情勢や話題、季節など色々な切り口で、図書館内外に企画展示を行った。 ・生徒図書委員会の活動を通して、図書館行事への関心を促した。 ・企画コーナーの本を手にとる生徒が多く、特にジャケット（表紙）を押し出した紹介の書籍が利用回数上位となった。貸出数全体の伸びにはつながらなかったが、企画を通して生徒の嗜好を知ることができた。 ・教科担当者の協力を得て、ICT使用の授業の中で確かな情報、深い理解を得るため書籍を活用してもらった。	
評 価	A	・図書館に親しみやすい雰囲気を作るとともに生徒の興味・関心を把握した。 ・ICTを利用した授業や講演に対応し、図書館利用の幅を広げた。
学校関係 者の意見	・生徒に対して図書館や読書に興味を持ってもらい、読書を活用して探究する姿勢を提供した。 ・生徒の読書への興味を喚起する企画を考え続けていく必要がある。	
次年度へ 向けての 課 題	・図書館が気軽に立ち寄れて、憩いを感じられる魅力的な場所になるよう、情勢や話題を生徒の生活や関心に合わせながら、企画展示を工夫していく。 ・ICT利用促進の流れの中で図書館が果たせる役割を考えながら、良書の選定、蔵書の整備、電子書籍の導入など環境整備を引き続き行っていく必要がある。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった

重点項目	学校生活	
重点課題	- 生徒が日常生活において災害を未然に防止し、自分と他人の生命を守り障害を防止し、安全な生活をおくるとともに、正しい理解と態度を養う。 - 教職員間で生徒理解を十分に図り、不登校、学校不適応、人間関係等の心理的な原因による体調不良等への対応や、相談、カウンセリング、専門医への繋ぎなど充実を図る。	
現 状	- 独立行政法人日本スポーツ振興センター災害共済給付制度への加入は、任意であり掛け金や保護者の同意書も必要であるが加入率は100%を維持している。生徒や顧問、授業担当者への注意喚起をしているが、事故発生件数自体は減少が見られない。 - 様々な心理的な問題を抱え、不登校や保健室登校となる生徒がおり、教職員は生徒理解のためと教育相談スキルの向上が欠かせない現状である。	
達成目標	①AEDや応急処置の講習会を実施	②半期ごとに研修会の実施
	年1回	年2回
方 策	- 生徒や顧問、担任、授業担当者へ、危険箇所や事故の起こりやすい状況等について注意喚起したい。また、AEDの校内設置場所を認識させる。生徒自身が危険を予知したり回避したりできるように、応急処置講習会は感染予防対策を講じて実施する。 - 研修会を通じて、生徒理解のスキルアップをめざす。また、不登校、学校不適応、心理的な原因による体調不良等の生徒対応を円滑に行うため、担任や顧問、学年主任、保健厚生部、保護者が連携して問題解決に取り組み、スクールカウンセラーや医師などの専門家の効果的な活用を図りながら、確実な問題の解決にあたる。	
達 成 度	① 7月熱中症予防と応急措置研修会 10月救急講習会（AED講習） ・年2回の実施ができた。	② 6月カウンセリング研修会 10月カウンセリング研修会 ・半期ごとに2回実施できた。
具体的な 取組状況	- すべての部活動を対象に、「熱中症予防と緊急時の応急措置」研修会を実施した。事例から熱中症の症状とその予防方法について、正しく理解することができた。 「AED救急講習会」は、保健委員を対象に、AEDの操作と緊急時の応急処置について周知させることができた。参加生徒からは、正しい使い方や協力して緊急時に対応することが重要であるとの感想が多くあった。 - 本校スクールカウンセラーを講師として、1回目は、「いじめについて考えたこと」としてスクールカウンセラーと生徒理解を深めた。2回目は、「今どきの子どもたちについて思うこと」～先生たちの疑問を一緒に考えよう～と題して、教職員対象に研修会を実施できた。 具体的な生徒対応についても質問が出て、事後の教職員アンケートでは、継続して研修会を開いてほしいという意見が多くあった。	
評 価	A	- 救急法の分野は、常に新しい知識と技術が進んでおり、応急方法も多様化してきているため、その手順について講習会を通して体得することができた。 - さらに、自身の健康管理を意識させるよう指導啓発していきたい。 - 教職員自身の学びを高めるために研修会を継続していきたい。
学校関係 者の意見	「熱中症講習会」と「AED講習会」を実施し、日常生活で有効な緊急時の処置について学ぶことができた。 - 心身ともに大切な命を守るために、応急処置や救急救命措置についての講習会を継続したい。	
次年度へ 向けての 課 題	- 日々の生活に目を向け、自他の健康の大切さについて学びを深める。また、身近な人に危険があるときは対応できる態度を育成するため、応急処置については継続して、講習会を行う。心臓疾患による突然死を未然に防ぐとともに救命率の向上を図る。 - 全教職員向けの研修会を、多様な生徒に対してきめ細やかな生徒対応ができるようになるために研修会を計画し、実施する。また、緊急時の応急措置について対応できる態度を育成する。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった

重点項目	その他	
重点課題	PTA活動への関心を高め、自主的・積極的な参加を推進する	
現 状	・PTA総会への出席率は、3学年の進路説明会を同時開催することで50%を超える水準となっていたが、昨年度は感染拡大防止のため実施されなかった。変更連絡など学校ホームページ等を活用して情報発信を行うことで状況の理解に努めた。今後も積極的に活用したい。 ・本校独自のPTA事業として行っているPTA視察研修や食堂利用体験の満足度は90%を超える水準で、参加者も増加している。また、3年前よりPTAによる生徒への職業紹介講座を実施している。	
達成目標	① PTA定期総会時の説明による学校の教育方針に対する理解度	② PTA視察研修事業・PTAによる職業紹介講座の満足度
	90%以上	90%以上
方 策	・PTA定期総会の土曜日実施と1・2年生の授業参観・3年生の進路説明会・学年別懇談会の同日実施を継続し、保護者の日程的な負担を軽減することで、保護者が参加しやすくなる環境を整える。 ・PTA定期総会時の学校長・進路指導部長・生徒指導部長による学校全体の概況説明、学年別懇談会での指導方針を説明してもらうことで、本校の教育方針に対する理解度をより深める機会とする。 ・PTA視察研修先の事前アンケートと実施後の事後アンケートを継続実施し、その内容を踏まえて、より魅力ある研修会となるよう計画を立案する。また、2年生対象に行うPTAによる職業紹介講座については、生徒の希望に沿う職業人を招聘し、なるべくミスマッチの無い講座選択を実現する。 ・PTA事業について多くの会員の参加を得られるように、行事内容を配布物と学校HPでの配信と両方で行う。 ・機会ある毎に情報メール受信の登録を促し、多くの保護者に情報配信できる体制を整える。	
達 成 度	今年度は感染対策をしながら従来の形式での総会を実施したが、出席率は37.4%程度であった。(委任状を含め94.3%の承認である。)	行事は3月14日実施予定である。
具体的な取組状況	・今年度もコロナ感染不安の影響のため、実施した行事への参加者が少なかったが、事業の連絡や情報配信については、迅速かつ丁寧を心掛けて実施した。 ・PTA総会は感染対策をしながら、通常の開催を行った。 ・PTA視察研修は感染対策をしながら少人数での視察を実施した。 ・PTA職業紹介講座は、PTA役員及び進路指導部と連携し14講座を開設予定であり、3月14日に実施する。	
評 価	B	コロナ禍で中止せざるを得ない行事もあったが、実施行事はおおむね達成した。
学校関係者の意見	・PTA活動への出欠確認は、Google formの対応が定着し、職員の事務負担も減少した。 ・コロナ禍で参加意識が薄れている現状を打開するため、さらに工夫することが課題と感じている。	
次年度へ向けての課題	・PTA主催行事には、教育活動の理解や進路意識への関心に関わる部分が多いため、継続して要望を取り入れ、理解度・満足度を意識した行事の実施に努めたい。 ・コロナ禍で行事への参加意識が薄れているため、配信方法、行事の再考も必要である。	

<評価基準> A：達成した B：ほぼ達成した C：やや不十分だった D：不十分だった